

# 第 1 回 分離派 100 年 研究会

2012 年 10 月 27 日（土） 14 時—17 時 30 分

東京大学 本郷キャンパス 工学部 1 号館 3 階 建築学専攻会議室

## ドイツ・モダニズム建築の源流 — 青島の「改革建築」と日本分離派

長谷川章（東京造形大学 教授）

ドイツは 1871 年統一後、ゲルマン民族のアイデンティティの追求のため、大文字の歴史様式に背を向け伝統へと回帰した。とくにヴィルヘルム II 世の時代（1888-1918）には伝統的な農家や城郭に祖型を求めた「改革建築」が主流となった。この時代とは、まさに中国山東省膠州湾の青島がドイツ帝国海軍省直轄保護領となった 1898 年 4 月 27 日から、1914 年 11 月 7 日に降伏し、1919 年 6 月にヴェルサイユ条約を締結した時期に重合する。このため青島は「改革建築」の博物館の様相をなし現在に至っている。

このゲルマン的造形要素のピクチャレスク建築に感化されたのが 1919 年 9 月に青島を訪れた滝沢真弓、山田守、堀口捨己であった。翌年発表された卒業設計は「改革建築」に酷似し、分離派として日本の前衛建築の第一歩を踏み出すことになる。

## モダニズムに託されたものは何か — ヴィルヘルム帝政期における建築とデザインの改革

田所辰之助（日本大学 准教授）

モダニズムが生まれた背景に目を向けると、ヨーロッパにおけるのと日本とでは大きく事情が異なることがわかる。ドイツでは、バウハウスなどに先んじて、第一次世界大戦前のヴィルヘルム帝政期にさまざまな問題が露呈し、改革への先鞭がつけられていった。ベーレンスやムテジウスの世代、タウト、グロピウスがまだ三十代の頃、たとえばかれらを結びつけるプラットフォームとなったドイツ工作連盟は、いったい何を克服しようとしたのか。分離派が置かれていた時代状況との距離を計測していくことで、両者がモダニズムに託そうとしていたものの相違を浮かび上がらせていきたい。

- 入場無料
- 定員 20 名（参加ご希望の方は、下記までご連絡ください）  
法澤（京都大学田路研究室）ta-hosawa@archi.kyoto-u.ac.jp
- 研究会後、懇親会を予定しています。